

城里町の文化財さんぽ(一七)

町指定文化財(史跡)

伊藤益荒・斎宮自刃の碑

指定年月日/昭和五八年三月三日
所在地/城里町小勝
管理・所有者/押寄木自治会



▲伊藤益荒・斎宮自刃の碑

城里町小勝の高田山山中にある「伊藤益荒・斎宮自刃の碑」は、この地で亡くなった尊王攘夷の活動家を弔ったものです。

伊藤益荒(嘉融)は、肥前(長崎県)島原藩士で、弘化元(一八四四)年に島原藩の江戸屋敷で生まれました。文久三(一八六三)年に江戸を脱出して京都に上り、尊王攘夷運動に奔走しました。伊藤斎宮は、高崎藩の人とい

われ、益荒とは同志として最後まで行動を共にしました。

二人は、尊王攘夷の実行を求めて元治元(一八六四)年三月二七日に筑波山で拳兵した天狗党に参加しました。天狗党は、日光東照宮参拝や太平山占拠の後、再び筑波山に戻りますが、七月二四日には山を下り、天狗党本隊は水戸城奪回を目指して進攻しました。益荒ら他藩出身者は、横浜を目指して潮来から鹿島に入りましたが、幕府軍の攻撃を受け、九月七日には西郷地(小美玉市)に退却。ここでも幕府軍の攻撃に遭い秋雨の中を敗走。九月八日には、池野辺から大橋村(共に笠間市)に至り東の間の休息。ここから、各々分散して下野国(栃木県)を目指すこととなりましたが、九月九日、益荒と斎宮は高田山の藪の中を潜行中に笠間藩兵に発見され、自刃して果てました。

後年、旧小勝村民により自刃の碑が建立され、現在も「お天狗さま」として押寄木自治会が祀っています。

問合せ 教育委員会事務局
029-1288-3135

俳句

秋涼し朝の舟みな湖心向き
仲田 まちゑ
爽やかや挨拶交す登校児
今瀬 多代美
風止んでコスモス自分の色となる
鯉淵 寿美恵
コスモスの風爽やかに海遙か
綿引 英子
向日葵の花どこまでも遠筑波
飯村 昭子

蕎麦の花棚田の水車廻る音
森 静江
食べる分親指ほどの茗荷の子
竹内 幸子
まとひつく光のまぶし台風過
瀬谷 博子
校庭の教えの像にてる残暑
岩下 金司
大粒の雨は白刃に残暑かな
田口 勝元
湯の宿の店に地出来の梨子の山
寺門 孝子

文芸しろさと

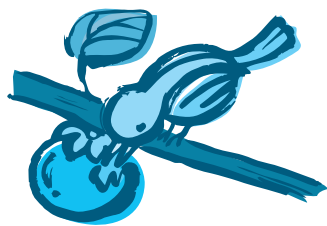
短歌

前向きに生きよと吾を諭し
をり好奇心も健康であれ
山形 式妙
トウモロコシ作ればカラスにつひ
ばまれ網をかぶせて実入り楽しむ
杉山 みちこ
道の駅に売られる野菜その
中に友の名ありて迷はず選ぶ
渡辺 千紗子
汗しつ草ひき居れば湧き上
る夏雲追ふて空を見上げり
大森 久子
寺訪えば慈悲の目差し六地
蔵赤いお帽子やさしいお顔
青柳 京子

新緑の中に梔子の白き花や
がて紅き実なるを待ちをり
所 美恵子
黙とうをしつつ思えり少女期の
戦禍におびえ暮らせし日々を
枝 不美
雨戸を開れば有明の月裏山に
ひぐらし鳴きて朝は来たりぬ
島 愛子
はなれ住む一人住まいの男孫
より吾の老いの身気づかう電話
坪井 きよ子
生きていれば喜寿の祝と亡夫
に香燵く息子。パ。パ。子なりし
萩谷 登喜子
対岸にあかり灯りて弟を偲
ぶ初七日牛久沼の辺
富田 佐智子

川柳

当てずっぽう五輪予算の乱高下
富田 多蔵
稲穂まで腰を曲げての高齢化
飯村 孝一
城里に生れて米寿ただ感謝
川原 清



山間路を廻りて行けば猪の
被害大きく電柵目立つ
菌部 光子
どんな日もどんな人にも思え
やりいつの間にか天国暮らし
富田 欽子